と時節相違せり、

〔碩鼠漫筆五〕稻負鳥考○中略

古今集秘註卷四云、いなおほせどりとは、萬葉に稻負鳥とかけり、是にあまたの儀あり、一は雁。一は、山鳥、一は鴾（タウ）、一は鵆（クヒナ）。一は雀、一は鷸鴴などを云へり、此中まづ雁と申事は、今の歌に、春村曰、我門に云々の歌を指たるなり、各別の鳥に讀合たれば、儀にも叶はず、次に山鳥とは、稻を負へる姿ありと申せども慥ならず、次に鴾と申事は、鴾につきて稻負（タフ）のひゞき有に依て也、家隆の歌に、秋の田の稻負鳥のこがれぬも木の葉催す露やそむらむとあるは、鴾と聞えたり、此歌につきて、人のそれかと知侍るにや、又はくひなと申說もあり、此鳥の姿山鳥の尾の如にて、稻を負たる心也、故に云傳ふ、又雀と申事は、狹衣に稻葉の風も耳近くは聞ならひ給はぬに、稻負鳥のおとなふも、さま〴〵さまかはりたる心ちして、心細げなりと侍るは、雀かと申せり、古歌にも、雀てふ稻おほせ鳥のなかりせば門田の稻を誰かおほせむ、狹衣の詞は此歌をおもへるか、○略中いまだ必定の說見えねば、猶當否を論ふべし、○略中稻負（タフ）のひゞき近ければ、鴾（タウ）なめりといへるなどは、假字違をもおもはざる物にて、無下に拙き謬說なりけり、此他雁なり、馬なり、田夫なりなどは、論ふまでもなかるべし、かゝれば此鳥延喜の頃は、夫と慥に云られけむを、天曆頃には知る人なくて、順朝臣も詮方なければ、たゞ和名をのみ載られたりしなるべし、奥儀抄袖中抄をはじめ、後々の諸說にも、何とも云られぬ鳥なりとあるは、中々に心にくし、されどさてのみ云てあらむには、かく取出たる所詮なければ、僻按をも云るしそふべし、按ふにこは舊說の中なる鴾（タウ）といふに從ふべし、鴾は和名豆岐なれど、後には止伎と訛り、今も猶然呼べり又一名を太宇と呼べり、此鳥は水禽の屬にて、和名抄の序に稻負鳥を山鳥とあるは、推當にいはれたるなるべし、かれに泥みて今水禽といふを疑ふべからず、晩夏より秋に至り、水邊の田野にすみ、宵曉によく飛翔りつゝ、なく、其聲かゝと叫くに似たり、大和物語に叫くと詠るも則是を云へる事云るかり、又稻負鳥と